

PICK UP MOVIE

『ジョイランド わたしの願い』

[2022年/パキスタン/パンジャブ語・ウルドゥー語/127分]

監督・脚本：サーイム・サーディク

© 2022 Joyland LLC

伝統を守ること
自分を生きること

1/17~



パキスタンの古都ラホール。画面に映る街や住まいの色彩の美しさに魅了される。豊かな歴史遺産に囲まれた都市で、人々はどんな暮らしを営んでいるのだろうか。

ラナ家の大きな屋敷で、きれいな服をまとった子供たちが楽し気にはしゃぎまわる。遊び相手をしているのは子供たちの叔父、この家の次男ハイダルだ。心やさしいハイダルは、姪たちをかわいがり、そのうえ兄夫婦や家長である父親のために、嫌な顔ひとつせず家事をこなす。というのもハイダルの妻ムムターズは、結婚前からメイクアップアーティストの仕事が続けたいと願い、そうしているからだ。

一方でハイダルの父も兄も、ハイダルが無職であることを恥じ、事あるごとにきちんと金を稼ぎ息子を産めと迫る。そんなある日ハイダルはダンサーの仕事を見つけてきた。それを機に、妻は仕事を辞めさせられてしまう。家事をするためだ。これは父親の強い意向だった。しかも、家族は誰もムムターズの味方をしてくれなかった。

ハイダルが未知のダンサーの仕事に飛び込んだのは、リーダーのビバに惹かれたからだ。ビバはクィア、つまりパキスタンのようなイスラム世界ではヒジュラ（第三の性）と呼ばれる存在だ。世間の蔑みに抗して自分の道を歩むビバに、ハイダルは熱い好意を抱くまでになる。ビバの存在を知ったムムターズは、家に閉じ込められてしまった自分に比して、夫が仕事を楽しまつつ可能性を広げていくのを羨み、むしろ夫を励ましさえする。その反面でムムターズ自身は、息子を妊娠したことを知っても喜べない。ラナ家では、家を継ぐ男の子が大事なだけで、自分はどうでもいい存在なのだ。彼女は一人追い詰められていき、大きな決断をしてしまう。何が彼女をこれほど苦しめたのか。日々のささいな敵意や攻撃や無視が、いかに人を深く傷つけていくかを、この作品は非常にこまやかに描き出している。伝統と呼ばれるものが内包する価値観を、厳しく見直すことが必要だとの訴えが、胸を撃つ。

ところで上田映劇で同時期に上映されるこの作品を含む3本が、いずれも世界のあちこちから家父長制への異論を唱えているのは興味深い。あとの2本は、チリの『私の想う国』、ジョージアの『ブラックバード、ブラックベリー、私は私』だ。この日本はジェンダーギャップが大きいことは周知のとおりだ。日本独特の家父長制のありさまを掘り下げ、改革を模索するような作品が生まれて欲しいとの思いを強くした。

プロフィール

田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からハウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。